

(1)ユーラシア歩き旅 和田航一 寄稿

10年前から、大学のワングルOB仲間とユーラシア徒歩リレー旅行を続けている。1996年秋に経度ゼロのロンドン・グリニッチをスタートして昨年5月に中国・新疆ウイグル自治区の首都ウルムチ付近に到達した。ゴールの東京は東経140度とすれば、経度では66%歩いた。ドーバー海峡を越してフランス、ドイツなどを歩き、東ヨーロッパはハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、トルコは黒海沿いに歩きグルジア、アゼルバイジャン、カスピ海は飛ばし中央アジアはトルクメニスタン、カザフスタン、中国西部に達した。今年の5月にはシルクロードの起点、西安に到達する。スタートした当時は、一緒に歩く仲間の平均年齢は58歳ほどであったが、最近では、若いOBが参加しているが、最高年齢の小生70歳を頭に平均67歳程度である。1日の歩行は当初30kmであったが、最近では25kmとしている。

旅の仕方は色々あるが、気候、風土、歴史、交通、宿所を調べ航空券を手配する。東西ヨーロッパは全土観光地と言えて1人、2人、家族で歩き、行き当たりばったりで安宿に泊まる。旧ソ連邦のグルジア以東では事前に現地旅行社に宿、伴走車、通訳を手配して6,7人チームとして2人連れで歩く。

印象的なことでは90年代のソ連邦解体で連邦諸国の人々の明るい表情である。歩き旅では小さな村町で出会う年寄り、女性、子供達と直接触れ合う楽しみがある。中央アジアでは人っ子一人居ない沙漠と原野を終日、逃げ水を追いながら地平線を目指して歩く。中国は天山北路・夏でも雪の消えない山脈の北麓を歩いた。

旅を意味する「トラベル」は、「トラブル」が語源と信じている。途中立ち寄ったモスクワの地下鉄でロマ母子の集団拘りに会ったり、ルーマニアで少年の引ったくり、KGBに警察署に連行されたりしたが、概して治安はよく、日本でも出会いそうな程度と感じている。道々で出会う普通の人々の親切は日本以上といえる。現地の人々と直接触れ合うことのできる歩き旅は格別である。

旅から戻って現地の印象から、その地の歴史・近代史について興味が湧き沢山の本を読んだ。ルーマニアではドラキュラ伝説の本当の歴史、イスタンブルではオスマントルコ・コンスタンチノーブル陥落、グルジアでは、スターリンの生地で広場に残された銅像に触れてスターリンとロシア革命などがある。

この10年間で自分は9度の旅で2500km歩いた。国内では足慣らしに中山道を歩いている。昨年はこれまで歩いた仲間30人が撮った80点の作品で写真展を開き好評であった。今年5月は中国大陸中部を延々と歩き、3年後には東京の母校門前に着くつもりだ。その時小生は74歳のはずだ。